

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：15501  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2012～2014  
課題番号：24730704  
研究課題名(和文) 児童虐待と子どもの社会化に関する研究  
  
研究課題名(英文) Socialization study of abused children  
  
研究代表者  
田中 理絵 (TANAKA, Rie)  
  
山口大学・教育学部・准教授  
  
研究者番号：80335778  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)： 児童虐待被害者へのインタビュー調査と、児童養護施設における参与観察・施設職員への聞き取り調査を行った。その結果、児童虐待対策の動向、男児間の性的虐待、虐待後への発達影響 - 学力達成の低さ・自信のなさ・親子関係への懸念など - が確認された。また「児童虐待の再生産論」については、一般性を肯定しながらも、ただし自分は異なると指摘する人が多い。児童虐待を再生産してしまうのは子ども時代の経験ではなく、彼らが陥りやすい社会的罠に引っかかるか否かであるとする言説を得られた。

研究成果の概要(英文)： Investigate the people until late adolescence from before adolescence with experience who had received child abuse, and analyzed their life history. As a result, even if the difference is seen in the cause and form, the timing of child abuse, the similarity has been confirmed in such low academic ability, there is no self-confidence, parent-child crisis. They tend to answer and while recognized the generality of the "re-production theory of child abuse", but "I'm normal." After all, the cause of the re-production of child abuse rather than childhood experience, then, they will be pointed out to be the whether the results they were caught in the social traps prone.

研究分野：教育社会学

キーワード：児童虐待 再生産 児童養護施設

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、これまで児童養護施設においてフィールドワークを行い(約1回/週)、それと並行して、子ども期に児童虐待・家族崩壊を経験した成人に対する面接調査を12年以上に渡って断続的に実施し、データを蓄積してきた。その結果、家族崩壊の現代の特徴として、多くの児童が虐待被害者と重なること、家族的背景や虐待に至るまでの過程は多様であるが、児童虐待被害後の子どもは、子ども期のみならず成人期に掛けて類似した社会化パターンを経験することを発見した。これまで多様性を指摘した研究は多いが、類似性を指摘した研究は皆無であり、また子ども期の虐待経験が成人期にまで及ぼす影響を実証的に解明した研究も非常に乏しい。

そこで本研究では、この類似性を実証研究において解明することで、虐待被害後の子どもの社会化研究において新たな研究視角を提示したいと考えた。特に、申請者はこれまでの研究で、虐待を受けた子どもの特質 - たとえば、自分の能力に見合った成果・名誉が得られる状況にあっても何故かそれを故意に捨てることや、「児童虐待の再生産」言説を信じて自分の未来を憂う姿など がこの類似性の中に見られることを確認しており、その解明は子ども(家族)への支援政策においても有益な成果をもたらすものと期待できる。

## 2. 研究の目的

以上の理由より、本研究では、児童虐待を経験した後の子どもの社会化パターンを成人期まで長期に渡って解明し、特に「児童虐待の再生産」に関わる諸要因を実証的・理論的研究において析出することを目的に設定した。児童虐待の再生産問題は言説として一般に流布しているが、児童福祉現場では必ずしもそうとは言い切れないといった知見も出ている。この点を含め、子ども期に虐待を経験した者がどのような社

会化過程を経て親になるのかについて、丁寧な生活史調査から解明することとした。

## 3. 研究の方法

(1) 実証研究 : 子ども期に児童虐待の被害経験のある成人を対象に面接調査を行い、児童虐待に関する口述史を蒐集する。この分析によって、虐待後の子どもの長期的な社会化過程の解明が進むと期待できる。その際、虐待経験者の社会化の類似性の条件検討も試みる必要がある。そこで、まず地理的条件による類似性の可能性を検討するために、事例収集地域を拡大する。具体的には、茨城県から沖縄県までの関東から西日本地域において面接調査を実施した。

(2) 実証研究 : 児童虐待被害者へのインタビューと平行して、児童養護施設において家族崩壊後の子どもたちの日常生活場面を参与観察し、蒐集した口述史と照会しながら分析を試みる。特に、これまでの研究で、子ども期に虐待被害にあった者の共通点として「児童虐待の再生産」に対する不安感が高いことがわかっている。そうした心配は思春期頃から表れ、子どもの自己肯定感や将来への展望を抱けるか否かに対しても影響を及ぼすが、この問題は実証的研究データが不足しているため理論化に至っていないため、中高生の日常生活での会話収集は重要である。

以上の聞き取り調査によって、児童虐待後の子どもに対する社会的ケアや行政機関などのアプローチのあり方・問題点について問題提起が可能となると考えた。

(3) 理論研究 : 実証研究と並行して、児童虐待の被害者に対する社会的まなざしに関する理論研究を行う。というのも、虐待へのまなざしによって社会政策がつけられ、対策費用が割かれることになるためであ

る。あるいは、子どもの発達上の課題においては、子どもは虐待を受けることで家族から受ける心理的・身体的被害を受けるが、それだけでなく、それが社会的にどのような意味をもち、他者（社会）から如何なる者として扱われるのかといった問題も発達上に大きくのしかかる。つまり、児童虐待は、その事象単独ではなく、社会的反作用の様態もまた分析しなければならない。

#### 4. 研究成果

(1) 児童虐待予防対策における動向と今後予想される課題：児童虐待防止法など法規では、虐待の発生予防から、早期発見・早期対応、被虐待児の保護・支援の3段階で対応しながら、家庭から虐待的関係を取り除くことで親子関係の再統合を図ることを目標とし、そのために関係機関が連携してあたることで、児童虐待への対応として必要だと考えられている。

現在、児童虐待が発生する原因は、保護者や子どもにおける身体的側面、精神的側面、社会的側面、経済的側面、近隣・親戚との関係等の要因が複合・連鎖的に絡みあって起こるとされている。しかしこれは、同じような状況下にあっても虐待に至る親とそうではない親が存在することから、結局ケースバイケースであって、つまり、いつ誰がどういうきっかけで虐待を引き起こすかについては分からないということである。そこで、対象を全体へ拡大し、潜在的なリスクを抱えた人たちを支援対象として浮かび上がらせようとする方法（ポピュレーション・アプローチ）が採択されるようになった。

たとえば、2009（平成21）年の児童福祉法の改正以降、「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」が実施されるようになり、児童虐待の危険をもつ家庭へのアウトリーチが求められている（ハイリスク・アプローチ）。ところが、これによっ

て、虐待死亡事件等のケースでは、防止の最前線に立つ保健師・市職員が「自分の努力が足りなかったからだ」「もっとできたことはなかつたらうか」など自責の念を抱く姿も見られ、そのフォロー体制の検討の必要性が、今後、予想される。

(2) 児童養護施設への入所児童へのインタビュー調査結果：まずは、施設内で生じる問題が明らかになった。特に、児童間の性的暴力として、今回は、男児から男児への暴力問題が抽出され、施設内で発見されずに数年間にわたって代々行われるケースが2施設での聞き取りで明らかになった。被害少年においては、成人後も鮮明に記憶に残っている。また施設での対策としては、「部屋移動を禁止する」「風呂へは1人ずつ入る」などの方法がとられていたが、そのきっかけを探ると、別の施設の子どもが措置された結果、児童間虐待が伝達された施設が見つかった。ここから、施設間で子どもの悪しき習慣が伝播することが明らかになった。

また、虐待に起因する精神疾患などの症状があらわれるに至るまでの過程が明らかになった。原因としては、父母間のDVや父親の暴力などが多くあげられた。また、成人への聞き取り調査において、そうした親が死亡したと知った際の安堵感（「これで完全に縁が切れる」「迷惑をかけられることがなくなった」等）なども得られている。しかし子ども期にあっては、そうした親であっても愛着を抱いているケースが多い。これら事例研究から、児童虐待は、親から子どもへ及ぼすダメージだけでなく、その後の発達過程においても長期にわたって継続することが指摘できるだろう。

(3) 「虐待の再生産言説」に対する見方：子ども時代にインタビューした被調査者の

なかで、現在、成人となり生殖家族を形成している方へ、「虐待経験者が親になると、今度は自分が加害者となる」という虐待の再生産言説について質問した。その結果、そうした言説の存在は肯定されるが、自分に関しては起こらないという回答が多く得られた。しかし、子どもが成長する中で、「自分の子どもが、自分が虐待を受けた年齢になってきて、やはり暴力をふるうかもしれない」という不安もみられた。したがって、虐待再生産について「自分は関係ない」というスタンスをとりながらも、虐待被害者にとって、この言説は自己の親アイデンティティへ無意識に影響を及ぼしていると指摘できる。

今後、虐待再生産に関わる大きな要因を特定することが、ますます求められるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

園田幸江・田中理絵，司法・矯正領域におけるレジリエンスの認識に関する研究，『山口大学教育学部研究論叢』第 62 巻・第 3 部，査読無，2012，pp.239-253，<http://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/G0000006y2j2/metadata/C010062000323>

〔学会発表〕(計 2 件)

田中理絵「児童虐待の再生産に関する一考察」中国四国教育学会 66 回大会，2014 年 11 月 16 日，広島大学（広島県広島市）

田中理絵「家族崩壊と子どものスティグマ 児童虐待政策の方向について」徳島大学神経病態解析学セミナー第 16 回，2014 年 10 月 17 日，徳島大学（徳島県徳島市）

〔図書〕(計 4 件)

田中理絵 他，一藝社『受難の子ども～いじめ・体罰・虐待～』2015，158-173

田中理絵 他，放送大学教育振興会『人間発達論特論』2015，140-157、181-199

田中理絵 他，北大路書房『幼児学用語集』2013，224、226-227

田中理絵 他，ミネルヴァ出版『新しい教育社会学』2012，20-33

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田中 理絵 (TANAKA RIE)

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：80335778